決して
ケモノに堕ちる快楽を
味わってはならない

SAMPLE　サンプル　試読

隷獣

～郁美モノローグ版～

あんぷらぐど著

荒縄工房・発行

人は獣となってのち、
ふたたび人に戻れるのだろうか。

SAMPLE　サンプル　試読

SAMPLE　サンプル　試読

「郁美モノローグ版」の刊行にあたって　８
はじめに　１０
山ガールにあこがれて　１３
豹変した男　２６
全裸の山行　４９
浣腸登山　６５
友の裏切り　８９
しごき　１０３
苦悶の小屋　１２１
吊し打ち　１４０
ケモノ狂い　１６０

初めての絶頂　１７９
帰宅　２０１
揺れる気持ち　２１２
究極の選択　２２７
棒狂い　２４６
虫のエサ　２６６
虫取り改造　２８６
隷獣改造　３１４
熱いうちに打て　３２８
改造　３４５
使役されるケモノ　３７２

川床のエサ　３９２
穴の具合　４０９
ネズミ　４３１
串刺し　４４０
餌食　４５７
隷獣の素質　４７１
喉の調教　４８５
懲罰　５０３
湯治場　５２１
お披露目　５５２
帰る場所　５７５

インターミッション　５９６
キノコ狩り　６０４
ケモノの悦楽　６２３
獅子鼻　６３８
悪魔の乳首　６５４
ケモノの完成　６６６
終わりに　６８６
奥付　６９２

「郁美モノローグ版」の刊行にあたって

本書は、ブログ「荒縄工房」に掲載された「隷獣」を再編集したものです。もっとも大きな違いは、郁美による独白（モノローグ）となっている点です。

また、ブログでは掲載していない誕生日パーティー以降についても触れています。

本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐど

ＳＭ雑誌に「仲ゆうじ」名でＳＭ小説を執筆して作家活動をスタート。その後、作家活動は休止し、編集の仕事に携わる。ネットでは「ふにゃふにゃ」「あんぷらぐど」名でＳＭ小説を執筆。独自の自虐的ＳＭ、一人称による告白形式の作品、伝奇ＳＭ小説などを発表し続けている。東京在住。

はじめに

それに出会ったのは、二〇一〇年五月だった。ある山を登ったところ、山頂から望む深い森林に興味を持ち、地形図とコンパスを頼りに、通常の下山ルートを大きく外れて、獣道を下っていった。地形図では水源があり、そこから川が流れて麓の町に向かっていた。

またバス停のある峠にも近い。

等高線から見ても、それほど険しいわけでもなく、無謀なことだとは思えなかった。どれだけ迷っても、川沿いに下れば町に出るはずだから。

それでもやはり、日光をもさえぎる深い森の中で迷ってしまった。川を探して谷間を歩くうちに、見捨てられた古い温泉を見つけた。無人の小屋があり、河原に湯が出ていた。地元だけで知られている隠し湯のようだ。

そこに、郁美（いくみ）がいた。鬼丘（きおか）と名乗る男と一緒だった。

私は事情を知りたいと思った。鬼丘は積極的で「話を聞いてやってくれ」と言う。

「録音して、声を家族に届けてほしい」と。

私はその小屋に一泊して、携帯電話の録音機能を使い、約十時間、郁美の話を聞いた。

本書はそれに基づいて書き起こしたものである。読みやすい表現、必要な補足説明など、最小限、私が手を入れていることをお断りしておく。

山ガールにあこがれて

郁美と申します。二十一歳です。

そもそものことからお話します。

私は身長が百七十八センチで、高校生の頃は体重も八十キロほどありました。

中学生の頃から身長が伸びはじめ、スポーツに誘われることが多くなりましたが、なにをやっても不器用でうまくいかず、「どんくさい」と罵(ののし)られていました。

その頃、人気のあった女性芸人のネタから連想されて、「シロサイ」と呼ばれていました。

肌がきめ細かくて真っ白なのと、ブタ以上の迫力があったからでしょう。

でも、私だって女の子なのです。女の子らしい日常が欲しいだけでした。

大柄ですが、内面は夢見がちな少女のままでした。運動は苦手で、人と競うこともキライ。比較されることも好きではありません。

ただ外観と内面のギャップに悩んでいたのです。

大学に入っても見た目のコンプレックスがあって、うまく溶け込めずにいましたが、有希恵（ゆきえ）さんと出会ってから変わりました。

「ねえ、山に行こうよ」
彼女は大学でも目立つ美しい人で、裕福な家庭に育っているようでした。流行になっていた「山ガール」をやろうというのです。
「私たち、成人したんだから、その記念に、どう？」
二十歳になった記念に、誘われるままに八人ぐらいで高尾山へ行きました。
中学以来、一番、楽しい出来事でした。
それから私は毎週、有希恵さんや一緒に高尾山へ行った仲間たちと、山へ行くようになりました。
これまでダイエットに何度も失敗していましたが、

歩くことは苦ではなく自分に向いていました。
「もう、シロサイとは言わせない。せめて、動物なら白馬と呼ばれたいな」
そんな気持ちになっていました。
山へ行くようになって、十キロほどの減量に成功していました。体重は七十キロで、標準的な体重にかなり近くなっていました。
このままいけば、夢のようなプロポーションに近づけるかもしれません。
猫背が治り姿勢がよくなり、ほっそりしてきたこともあって、ナンパされたりモデルのスカウトに声をか

けられたりもするようになりました。
でも、私は恥ずかしがり屋で内向的なので、そうした声には耳を貸しませんでした。
やっと変わることができる、と私はそれだけでうれしかったのです。
自然の中にいると、自分の体の大きさ、無口で内気なことなど、まったく気になりません。ただひたすら自然の中を歩くのが楽しいのです。
有希恵たちと山へ行くようになって、山好きな女性の友達も増えましたが、彼女たちはどんどん競って高い山を目指すようになっていました。

私は、そういう激しい登山には興味がないので、一緒に行く山行きが減っていきました。
内気なので、知らない人と山へ行くのは億劫ですし、ひとりでは怖くて行けません。
このままでは、元に戻ってしまいます。せっかく変われそうだったのに。
有希恵にそのことを率直に話したことがあります。すると、「望月さんに聞いてみれば」と言ってくれました。
望月孝夫さんは、同じ大学の卒業生で自称「自然人」。何度か有希恵たちと一緒に登山をしていて、指導

をしてくれました。
望月さんは、私と同じぐらい背が高く野性的で、都会の似合わない素朴な男性でした。ちょっと老けて見えるほど落ち着いています。
「ひとりでもいけるような、あまり高くない山とかで、楽しめるところってありませんか？」
「うん。あるね。でも、ひとりじゃマズイよ。いくら低い山でもね。一応、熊とか猪はいるからさ。そうだ。今度の月曜日なら一緒に行ってあげてもいいな。仕事も休みなんだよ」
うれしい話でした。

異性としての望月さんを意識してしまいます。
学生ですから郁美は、混雑した週末ではなく、平日に山へ入ることができます。社会人のはずの望月さんもそれに合わせてくれたのです。

その日、私は、駅前で登山口へ向かうバスを待っていました。
典型的な山ガールのファッションでした。保温性の高いレギンス、カラフルなブッシュスカート、鮮やかな緑の防水性も備えたフード付きブルゾン。小型のリュックを担いで、赤い帽子も被っていました。

望月さんとは、登山口で待ち合わせる予定でした。
ザザーと大きなタイヤの音、そしてディーゼルエンジンらしい野太い音を立てた４ＷＤ車がやってきて、私の前に停まりました。
窓をあけて「おはよう」と長髪で痩せた望月さんが顔を出しました。陽に焼けて精悍な目をしています。三十過ぎには見えません。
「おはようございます」
私はハキハキと答えます。鼓動が激しくなっているのを感じていました。
「面倒だからクルマで来ちゃったよ。ここはアプロー

チが長いからさ。バス待っているとあと三十分は来ないし、バスって遅いだろ。さ、乗って乗って」

「はい」

荷物を後部座席に入れます。広い荷台には山の道具らしきものが天井近くまで詰め込まれていました。殺風景なクルマでホコリっぽく、男くさいのです。

その助手席に乗り込みました。

「じゃ、行くよ」

山道に慣れているのか、ひどく荒っぽい運転です。カーブではザザーッと砂利をタイヤが弾き飛ばす音がし、遠心力で投げ出されそうな勢いでした。

シートベルトをしていても、体が前後左右に振り回されます。
望月さんは無口です。私もそのほうが助かります。
つづら折りをいっきに上っていきます。バスの通る舗装道ではなく、細い林道に入っていきました。
三十分もジェットコースターのような運転に舌を噛まないように必死に耐えて、ようやく登山口です。
私はクルマから降りると、ふらふらになっていました。
「どうしたんだ、真っ青だよ」
「すいません」

砂利の敷かれた広場は、バスがぐるっと回れるギリギリの広さで、登山道の入り口を示す看板と登山ルートの案内図があるほかは、工事現場にあるような仮設トイレが二つあるだけでした。

私は、そのトイレに向かおうとしたのですが、降りたその場で気持ちが悪くなって、いきなり吐いてしまいました。

朝食は果物と飲み物だけだったからか、すっかり食べたものを戻しても足りず、胃液まで吐いてしまいました。

苦しくて、その場にしゃがみ込んでしまいます。

望月さんが見ている……。恥ずかしさもこみあげてきます。

「どうしたのかな？」

やさしい声ではありません。冷徹な声です。

「すみません。ちょっと気分がよくなくて」

豹変した男

望月さんは細長い杖を手にしていました。
ヒッコリーのシャフトに、頭部にはピッケル風に先の尖った嘴上の金属が握り手としてついています。末端には金属の鋭い石突きもあります。いつも登山のときに持ち歩いていました。
その石突きが、私の吐いたものを示しています。
「それは、なんだ」
「すみません」としか言いようがありません。
「すみません？　どう、すみません、なのかな」

「どうって……」
その杖が視野から消えました。
そしてビュッと風を切る音がしたかと思うと、私のお尻に激しい痛み。しゃがんでいたので、バランスを失い、手をついてしまいました。
「なんだ。わからないぞ」
二発目もすぐに飛んできました。動くことができず、尻で杖を受けます。ドスッと鈍い音がしました。
「私が、吐いたものです」
「そうだよな。これは、おまえが吐いたものだ。その結果、どうなったんだろう？」

「どうなった？」
三発目が尻を襲います。とうとう、耐えきれず、砂利に突っ伏してしまいました。
目の前に、自分の吐いたものがあります。
「いいか。おまえの汚いゲロで、自然を汚したんだぞ」
そして、望月さんの登山靴の先端が私の顎をぐいっと押し、嘔吐物に近づけようとします。
「やめて！　やめてください」
「自然はおまえにやめてくれとは言えないんだよ」
望月さんの大きな手が私の帽子を取り、髪をつかみ

ました。そして私の顔を持ち上げて少し引きずり、嘔吐物に押しつけました。
「ふえー」と声にならない悲鳴を上げるばかりです。
「いいか。覚悟しろ。おまえに本当に自然を愛する気持ちを叩き込んでやる」
「すいません、すいません」と謝るしかありません。
おそろしいことになりました。逃げなければ……。殺されてしまうかもしれないのです。
望月さんと二人きりなのです。ここに来ていることを知っている人はほかにいません。
「じゃあ、言うんだ。おれの言う通りに」

私は自分の嘔吐物に鼻を押しつけられたままで、言わされました。
「私は自然を汚した悪人です」
声が震えています。
でも、セリフはそれだけではないのです。こうも言わされました。
「自然を尊重する立派な人間にしていただくために、根本的に叩き直してください。そのためなら、どんなことでもいたします」
「よし」
ようやく許されました。

地面をころがるようにして、嘔吐物から逃れました。
そこにバスが入ってきました。のどかなホーンを鳴らし、二人の前に止まります。
これはチャンスです。このバスに乗って帰ればいいのです。
私は、あまりのことに力の入らない足をなんとか動かして、よろよろと立ち上がります。まだクルマ酔いとショックでふらついています。
バスが完全に停車し、ドアが開いたものの乗客はひとりもいません。
気持ちは駆け出していたのですが、ふらふらしなが

らバスへ近づきました。
「助けて」
運転手はこちらを見ています。でも、エンジンを完全に停止させました。
「私は自然を汚した悪人です」と自分の声が聞こえました。
振り向くと、望月が小型のレコーダーを手にしています。
「根本的に叩き直してください。そのためなら、どんなことでもいたします」
私の声が寂しいバス停に響きます。

運転手はそれを聞いて、笑っているのです。
「乗せてください」
「乗せるわけにはいかないな」
「助けてください」
「望月さんの言うとおりにしたほうがいいですよ。そうすれば、あなたも、もっとましな人になれますから」
「ウソでしょう」
「生意気だよね」と望月さんが私のすぐ背後に来て言うのです。
「ちょっと手を貸してくださいよ、忙しいところ、悪

いけど」
「うん。しょうがないよね。最近の登山者の中には、目に余るやつがいるからね。これも教育だから」
運転手は立ち上がり、降りてくると、私をドンと突き飛ばします。
バランスを失って倒れてしまいました。
「大きな体をしているわりに、体が弱いねえ。それで山なんか登れるわけないよ」
「そう。だから鍛え直す」と望月。
「じゃあ、まずはその格好だよね。虫酸が走るよ。山ガールだっけか」

「ああ、まったくだ」
二人の男が見下ろします。彼らの手が伸びてきて、私からザックを奪います。
「さあ、自然に戻るんだ。裸になれ」
「いや！」
この二人は示し合わせて私を乱暴する気なのです。
這って逃げようとしました。
しかし、笑いながら運転手と望月に足をつかまれてしまいました。
「ほら、逃げろ。もっと逃げろ」
亀のようにじたばたして足を蹴ってみても、二人の

男の力には及びません
砂利で手が擦れ、血が滲みます。きれいに手入れした爪もボロボロです。
意地悪な二人は、体操の手押し車のように、手だけで逃げようとする私をからかうように前進させます。
ある程度進むと、無情にも引きずって戻すのです。
ざーっと砂利をする音がします。
しばらくその繰り返しでしたが、やがて、ブルゾンははだけ、その下のチェックのシャツも出てきてしまいます。
運転手がブッシュスカートを引き剥がしたので、下

着とレギンスだけの下半身になってしまいました。
その下着に手がかかって、引き延ばされます。
「やめて」
逃げようと、前進する勢いを使って、パンツが股間から膝まで引きずり降ろされました。
剥き出しの尻に、冷たい山の風があたっています。
ショックで体が固まります。
「いや！」
「ほらほら、おとなしくしないと」
二人の男は、パンツを抜き取り、右足と左足をひとりずつ両手で抱えました。

トウモロコシの皮を剥くように、レギンスも引き抜かれてしまいます。
もう逃げることはできそうにありません。絶望的です。
「せーの」と二人はかけ声をかけて、足をすばやく持ち替えて、ひねりました。四つ這いでいられなくなって、ごろんと仰向けにさせられます。
真っ白な私の足を持っている二人の男は、ギラギラとした目で見下ろすのです。
「どうです。処女ですかね」と運転手。
「たぶんね」

「処女ってやったことないなあ」
「そうですか。じゃあ、試してみますか？」
「ぜひ」
抵抗しようにも力尽きていたのか、手にも足にも力が入りません。
多少、体が大きいとはいえ、運動能力は望月たちの方が上です。どうにもならないのです。
望月が足を持ち、運転手が私の後ろにまわって手を脇に入れてきました。そして、バスの中に引きずり込んだのです。
後部座席に投げ込むように落とされました。

運転手が制服のズボンを脱いでいます。その股間にはどす黒い逸物がそびえています。
はじめて、その男の部分を見せられて、パニックになっていました。
「いや、ダメ、やめてください！」
声もうまく出ません。
望月が足を持ち、大きく広げてしまいます。
そして運転手は、私の股間に体を密着させてきました。
硬いものが、ぐいっと入ってくるのがはっきりわかりました。

ゆっくりと、じわじわと運転手は私の中に押し入ってくるのです。
「ああ、ダメ。痛い！」
拳で近づいてきた運転手の肩を叩いたものの、彼はすぐ体をかわして笑っています。
そうやって彼が体をひねるたびに、ますます深く中に押し込まれてきます。
「おお、いいですね」と運転手。
「すごく締めてきますよ。大柄な女は、あそこも大味かと思ったけど、そうでもないかも」
「最初だけですよ。何度かやったら、ガバガバになっ

ちゃいますよ」
「そうですか。さすが、望月さんはベテランですな」
そんな声の中で、さらに運転手は吐瀉物で汚れた私の顔を私のシャツでふくと、タバコ臭い口を押しつけてきました。
生まれてはじめてのセックス、そしてディープキスが、見ず知らずの男なのです。
「うっぷぅ、ひゃ、いや、イヤ！」
抵抗しても、それ以上のことをしてきます。
男の臭い唾が私の口に入り込みます。舌の先で歯や歯茎をまさぐっています。

あらがっている間に、ブルゾンとシャツを望月が脱がします。スポーツ用の吸湿性のいいアンダーシャツもずりあげられ、お腹も乳房も露わにされました。

「いいオッパイですな。こりゃ、ホルスタインだ」

運転手は、誰にも触らせたことのない乳首を次の攻撃目標にしたようです。べっとりとした口でしゃぶり、歯の先でコリコリと噛みます。

「ああ！　そんなこと、しないでください。お願いですから」

泣いても叫んでもだめだとわかっていても、叫んでいました。

その口を、望月が私の服で塞ぎます。
「あわっ、うぐぅ」
殺されるかもしれない、と思いました。ここへ来ることは、望月しか知らないのです。
ひとり暮らしの女子大生が、いなくなったことを、誰が気づくでしょう。さして有名でもない地味な山に登ろうとしたことなど、わかるはずもないのです。
殺されて、山に放置されたら、何年も見つからないでしょう。
そう思うと涙が止まらなくなりました。自分はこのまま死ぬのです。

運転手は「いくよ」と言い、私の中に熱い射精をしました。
「がっう、うぐぐ」
嗚咽しても、彼らは容赦しません。
やっと運転手が私から離れたと思ったら、もう望月がそこにいました。
「ほら、これが欲しいだろ」
運転手は私の顔に押しつけられていた服をどけて、わざわざ望月の体を見せるのです。
それはさきほどのものよりも大きく、高い確度で突き上げていました。

「これから、たっぷりと教えてやるんだからな。ありがたいと思え」
望月が入ってきます。
「くぅう！」
それは、とても激しいピストンで、私の股間が引きちぎられるのではないかと思えるほどでした。
二度目の体験も、ただ苦痛なだけでした。
二人の、大量の精液を注ぎ込まれ、ぐったりしていると、残りの服もすっかり剥ぎ取られ、登山靴と靴下だけにされてしまいました。
望月は、太い首輪を手にしています。

「こいつをつけてやろうな」
私の首に巻き付け、喉が締まるほどきつく留めました。首輪には、長いチェーンがついています。
「じゃ、そろそろ行くから」と運転手。
「忙しいのに、手伝ってくれて悪かったな」と望月。
「いいさ。これも自然を守るためなんだから。じゃ、がんばって」
裸にされ、首輪をつけられ、引っ張られて、バスの外に引き出されました。
冷たい空気にさらされて、震えが止まりません。
バスはエンジンを始動すると、なにごともなかった

かのようにドアを閉じ、下山していきます。
ホーンが悲しげに木霊しました。
「助けて。殺さないで」
私はそれだけを、呪文のように唱えていました。

全裸の山行

「さて、これからだな。荷物を点検するか」
バスが見えなくなると、望月はそう言って私のザックを勝手にあけて、中身をぶちまけました。
「食べ物と飲み物はいるよな。これは虫除けか。いまのうちにたっぷりつけてやるよ」
小さなスプレー式の虫除けを私にふりかけます。岩のような手で体中にまんべんなく広げていきます。
「虫除けはこれが最後だ。これからは、虫に刺されることにも慣れないといけない」

自分たちで犯した部分にまで、虫除けを撫で付けます。
逃げようとしてもグイッと首輪を引かれて、身動きできなくなります。
「着替えも持って来たんだな。帰りにはカラオケにでも寄るつもりか？　だけどな。おまえに服なんていらないんだ」
剥ぎ取った私の服と着替えを一つにするとザックに押し込みます。腕時計も入れます。携帯電話はバッテリーを外してしまいます。
「自然を肌で感じるんだ」

「死んでしまう……」
「なんだって？」
「死んでしまいます」
「大丈夫。おれが死なせない。自然の大切さを骨身に染みるまで教えてやるからな」
殺されないかもしれない、という微かな希望にすがるしかありません。
「なんでもします。殺さないで」
「おいおい。ひと聞きが悪いな。おれがいつおまえを殺すって言った。おまえを立派な人間にしてやろうって言うんだよ。殺すなんてとんでもない。それに、な

んでもすると、さっき誓ったばかりじゃないか。それは守ってもらうからな」
そしてチェーンをぐいっと引っ張るのです。
「返事は？」
「わかりました」
「最初に言っておくが、殺しはしないが、死にたくなるような目には遭わせてやるぞ。何度も殺してくれって、おまえが頼むかもしれないが、それでも、おれは殺さない。いいな」
また首輪が引っ張られる。
「わかりました」

「おまえがまともな人間になれることを証明しなくちゃいけない。もしそれがダメなら……」
望月は低く笑う。「そのときは、人間以下になってもらう」
意味がわかりません。望月は狂っているんだ、と思いました。
「このザック、軽すぎるな」
クルマまで連れて行かれました。一・五リットルの水の容器を二つ、ザックに入れました。
「足りないかな？」
さらに二つ。

「これだけで六キロか。そのほかを合わせると十キロぐらいだね」
それを背負わせるのです。
裸の上に重いザック。目の荒いナイロンを肌に感じます。
でも、それだけではありませんでした。
「こいつを前に背負うんだ」
望月のザックを前から抱えるように持たされます。乳房が押し潰されます。なにが入ってるのか、その重さは背中のザックの比ではありません。
ロープを出し、二つのザックをしっかりと落ちない

ように私の体に縛り付けていきます。しかも私の手を、頭の後ろで組ませて縛りあげました。

「ほら、ちゃんと立て」

疲れ果てたロバが無理やり荷物をのせられたように、よろよろと立ち上がります。手が使えないので、どこかにつかまるわけにもいきません。

犯されたばかりの股間から、血液や精液が流れ出しているようですが、それを気遣う余裕もありません。

「よし。じゃあ、出発だ」

前を歩かされます。

望月は、背後からチェーンと杖を持って、離れてつ

いてきます。
登山道の入り口から、一歩、また一歩と足を前に進めます。最初のうちは、階段状になっていた道が、しだいに細くなっていきます。低い山なので、登りがあったかと思えば、散歩道のように平らに近い道もあります。
低山ならではの、鬱蒼（うっそう）と茂った森の中を進んでいきます。
いままでのように、景色や自然をながめている余裕はありません。
いつしか左手は、木々や藪の急峻な斜面になってい

ました。バランスを崩せば、谷へ転がり落ちてしまうでしょう。もしそこを落ちたら、自力で抜け出すことはできそうにありません。

飛び込んでしまおうか、と考えますが勇気がありません。それに、低い竹や木々もあるので、裸でそこに落ちるときっと私の体にグサグサと突き刺さり、むごたらしく、苦しみながら死ぬことになるでしょう。

しかたがなく必死に歩くのですが、とても遅く、道は果てしがないように感じます。

「はぁはぁ」

自分の荒い息ばかり聞こえます。

「ほら、ちゃんと歩け。一、二、一、二」と望月は言い、杖の石突きで、お尻を突きます。軽くやっているのでしょうが、ぐさっと刺さるような感覚に、思わず「ひーぃ」と悲鳴を上げてしまいます。

きっと真っ白なお尻に、石突きの赤い跡がついているでしょう。

お尻を突かれるのが怖くて、荷物なしでもきついぐらい、早いペースで歩いていましたが、しばらくすると息が切れてまた遅くなってしまいます。

すると、すかさず杖で突かれるのです。

「うひぃー」

涙を流しながら、三十分以上も、そうした状況が続きました。

何度目かのお尻の痛みに、私は耐えきれず、バランスを崩して、前のめりに倒れてしまいました。

抱えている荷物が幸いして、倒れても顔を打つようなことはありません。

全身から汗が流れ出ています。ザックを直接皮膚で受けているため、背中も胸も、擦り傷だらけになっています。

「はーはーはー」と激しく呼吸しますが、どれだけ呼吸しても、苦しみから逃れることはできないのです。

汗で顔に貼り付いた髪を、望月は石突きで、そっとかきあげました。
「なんだ。もうへばったのか。休憩してもいいが、おまえが休憩するときは、別のなにかをするときなんだぞ」
望月はザックから一・五リットルのボトルを一つ、取り出しました。
「どうだ、これを軽くするか？」
「はい、お願いします」
「だけどさ。軽くするというのは、ここに捨てるってことじゃないんだ。貴重な水だからね。おまえが飲む

んだよ」
「はい」
喉はカラカラです。朝食はバス停で吐いてしまい胃も空っぽでした。それから暴行され、激しい運動を続けてきました。
なんとか自力で上体を起こし、裸であることも忘れ、地面にへたり込んだままボトルに口をつけます。望月がそれを傾けていきます。
ぐびぐびと飲むと、生ぬるくてもおいしく感じました。でも、とても一・五リットルは飲めません。半分以上、余りました。

「さて、残りをどうするかだ。なにかいい方法があるかな？」
「わかりません」
「あるんだよ。ケツから入れるんだ」
「ええ！」
「脱水症状も抑えられるぞ」
望月は自分のザックから、ゴムの管を取り出します。
「こいつをおまえのケツに入れる。そしてボトルにこれをセットすると、自動的に入っていく」
「歩きます。歩きますから、それは……」
「だめだ。なんでもすると言ったじゃないか」

もはや抵抗ができない私を、望月は簡単に蹴り倒します。うつ伏せになって、尻が高く持ち上がっています。

望月の指が、私の唇に触れます。

「おれの指を舐めろ。たっぷりとね。そうしないと痛いぞ」

「むっふぅぅぅ」

水を飲んだばかりの口で、無骨な人差し指を丁寧にしゃぶるのです。指先は容赦なく頬の裏側に、舌に、喉の奥にまで入ってきます。

「この指がおまえの尻に入るんだぜ」

そう言いながら、口の中を指でさんざんもてあそびます。

そして抜き取ります。

「でかいケツだな」と笑いながら、しばらく肛門の外側を指先でいじっています。マッサージするように触っていると、ひくひくとそこが反応します。

「やめてください。お願いですから」

怖ろしいことだと思います。そこを触られるだけではなく、私の口の中でやったように指で犯すというのです。

浣腸登山

「欲しいって言ってるな。ケツ穴も喉が渇くんじゃないか」

ゆっくり指先が、排泄器官を押し広げます。

「ううう」と声が漏れます。

悔しくて、悲しくて。なんで、こんな目に遭わなければならないのでしょう。

敏感な入り口の部分を、こじ開けるように、太い指が侵入してきました。

「ふぁぁあ」

奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇一二年一月　第一版　二〇一四年十二月　第二版

著作権　あんぷらぐど（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●公式ウェブサイト

●荒縄工房　ＳＭ研究室

●荒縄工房　淫美

●エロな気持ちの日々

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。

SAMPLE　サンプル　試読